

(第三種郵便物認可)

猪苗代の観光調査

30、40代の家族連れ多い

多摩大と総研が報告会

客層ごとと促進プラン示す

多摩大学（東京都多摩市）経営情報学部の学生らと、同大総合研究所（総研）のプロジエクトチームが取り組んだ初の「猪苗代町の観光促進に関する現地調査」の報告会は二十四日、猪苗代町役場で行われた。

猪苗代湖や磐梯山などの自然景観を中心とした豊富な観光資源を有する猪苗代町の二十年度の観光入り込み数は、二百七万人で前年比約25%の減となっている。同学部の浜田正幸

准教授が指導する「浜田ゼミ」の学生約六十人と同大総研の松本祐一准教授は、猪苗代観光協会などの協力を得て半年前からプロジェクトに着手。現地調査は二十一、二十二の両日に町内と磐梯町、北塩原村裏磐梯を訪れた観光客や観光施設従業員らに対して聞き取りを行い、観光動向実態やニーズ把握を目指し



現地調査の結果を基に、猪苗代の観光の現状について発表する学生

た。

観光客四百二十六人と十一の観光施設から回答を得た結果、客層の年代別ではプロジェクトチームが得ていた情報とは異なり、三十、四十代の家族連れの観光客が多いことが分かった。日帰りや一泊旅行を中心に県内からの来訪が約三割、関東近県からの旅行者も多く、風景や自然環境に満足する一方で「交通の利便性が悪い」などの意見もあった。

学生はフィールドワークを通じ猪苗代町周辺の観光・物産の「ブランド力」や、豊かな自然と観光スポットを広く発信する「PR力」の弱さを指摘。調査結果を基に「短期滞在型観光プラン」の必要

性や客層ごとの観光促進プランも示した。報告会には町商工観光課や猪苗代観光協会の関係者も出席。天野信雄同観光協会事務局長は「われわれの調査と異なる結果もあり大いに参考になった」と述べた。浜田准教授は「スキー客など冬期間の観光動向調査なども取り組み、より充実したデータとして」とし、今後も継続的な調査に取り組み考えを示した。

性や客層ごとの観光促進プランも示した。報告会には町商工観光課や猪苗代観光協会の関係者も出席。天野信雄同観光協会事務局長は「われわれの調査と異なる結果もあり大いに参考になった」と述べた。浜田准教授は「スキー客など冬期間の観光動向調査なども取り組み、より充実したデータとして」とし、今後も継続的な調査に取り組み考えを示した。